る聲々。

保胤の情緒も亂れけむ

長生殿のうちには、春秋を留めり、不老門の前には、月のかげ遲し。

場所といひ亦人さいひ

弘徽殿の細殿に、たゝずむは誰々、朧月夜の内侍の督、光源氏の大將。

鶯の空音は計るとも乎

誰そや、此夜中に闔いたる門を敲くは、敲くともよもあけじ、宵の約束なければ。

孰心の極やこゝに在り

七尺の屏風も、躍らばなどか超えざらん、羅綾の袂も、引かばなどかきれざらん。

梅が枝（一名千鳥の曲）

鶯も亦餘情を愛すべし

梅が枝にこそ、鶯は巣をくへ、風吹かばいかにせん、花に宿るうぐひす。

杜鵑曰く琴の音は第二

花散る里のつれ〴〵、たえ〴〵の琴の音、花橘の袖の香に、山杜鵑音づるゝ。

夢ばかり頼む身ならん

思ひ寢の夢のま、、枕に契る明け方、覺めてはもとのつらさにて、涙の外はあらじな、

鳴ね方いと苦しからん

小夜更けて鳴く千鳥、何を思ひあかし寢、憂世を須磨の恨みにて我と等しき涙かや。

世には新る事ぞ多かる

白眞弓の眞弓の、そるべきはそらいで、八十の翁の、戀に腰をそらいた。

◉心盡

いつも飽かぬ景色なり

三保の松風吹き絶えて、沖の浪もあらじな、水にうつらふ月さもに、詠めにつゞく富士山、

心盡（一名小車の曲）

松風やある村雨やある

心盡しの秋風に、須磨の浦回の浪枕、衣かたしき獨り寢て、夢も結ばぬ夜なゝ。

あり原ゝ答へたりしか

故郷を遙々と、隔てゝこゝに隅田川、都鳥に言問はん、君はありやなしやと。

歌を詠まずには居れず

夏の夜の曙、夢を覺すほとゝぎす、白妙に見ゆるは、月にさらす卯の花。

戀なればこそと云ふ所

霧にたゞすむ小車、やつして立つる小車、人眼忍ぶの契りこそ、更けて閨の通ひ路。

長くもがなと思ひ兒か

飛鳥川の水上を、硯の水に偃き入れて、書く言の葉は盡まじや、今日も暮らさん命かや。

高き戀は無理に詩的

契りし宵のたそがれ、知るべ深き空炷、とめゐる方の萩の戸を、開くや袖の移り香。

天下太平（一名雛鶴の曲）

天下無類のめでたき歌

天下泰平長久に、治まる御代の松風、雛鶴は千歳ふる、谷の流れに龜遊ぶ。

人知れぬ契は、淺からぬ物思ひ、つゝむとすれど紫の、色に出るぞはかなき。

色に出すも嬉からずや

はかなくも隈なき、月をいかで恨みし、とにかくに我が袖に、絶えぬ涙の夕ぐれ。

花見てもこぼすべき涙

花の宴の夕暮、朧月夜にひく袖、さだかならぬ契りこそ、心あさく見えけれ。

と改めて斷る迄もなし

住吉の宮所、かき鳴らす琴の音、神の惠にあひそめて、過ぎし昔を語らん。

いと神妙に奏で玉へと

秋の山の錦は、龍田姫や織りけん、時雨ふる度毎に、色のますぞあやしき。

人も一度は斯はある也

せめて涙にて慰めん身

薄雪（一名東雲の曲）

恨めしや我が緣、薄雪の契りか、消えにし人の形見とて、涙ばかりや殘るらん。

それ故に輪廻は殘る也

比翼連理の語らひも、變れば易る世の習ひ、さりとては恨むまじや、昔は情ありしを。

一時は萌立つ樣思ひて

若紫を手に摘み、深き心の色ます、長き契と結びしも、草の緣りと知る可し。

朝日待間と思へぬ樂ぞ

東雲の雛に、露を含む朝顔、玉の鬘たをやかに、繫るや花のおもかげ。

我身一つの涙なられど

世の人の詠めし、月は誠の形見ぞと、思へば思へばなみだ玉をつらぬく。

世の味もそこにある也

芳野川の花筏、棹さすひまもあらじな、岩波高き山風、四方に散らす花の香。

羽織隠しても追付ぬ故

雪の晨（一名葵の曲）

雪の晨の嵐は、梢の花の散る風情、名殘惜しきはとにかくに、待ち得し君の歸るさ。

一度は深く思はれしな

あさましや我が身は、雲井の雁の夕霧に、おとしめられし思ひをば、いつの世にか忘れん。

思ひ寢の容易に覺めで

假眠めば面影を、しげ〳〵と短夜に、ほとゝぎす音づれて、初音に夢ぞ覺めける。

然り大に我意を得たり

詠むればいとゞだに、戀しき人の戀しきに、曇らば曇れ秋の夜の月に恨みはあらじな、

献立が入念に過ぎたり

嶺の嵐に通ふか、谷の水の流れか、寐覺に聞きし松風は、琴の音に通ひて。

怨れぬ身となるも嫌也

葵の上の時めき、加茂の祭の折柄に、車爭ひつれなきも、深き恨みなる可し。

裏組正許目錄

雲上

（一名武藏の曲）

世の中は左樣なもの也

雲の上の眺は、ありし昔に變らねど、見し玉簾の内ぞたゝい、なつかしやゆかしや。

歌人ならぬ程の身にも

おもしろや五月雨、花橘の匂へり、杜鵑音づれて、短夜なれど寐られぬ。

當然の事なれど今更に

中々に初より、馴れずば物は思はじ、忘れは草の名にあれど、忍ぶは人の面影。

遥瀬なさの枕に當れば

思ひ餘り、せきかねて、恨み寐る夜の涙は、床すさまじや、獨りたゞ、枕に戀ぞ知らるゝ。

いとゞ淋しき夢のあと

武藏野に行き暮れて、月を詠めて草枕、戀しき人を夢に見て、假寐の袖しぼる。

陸放ならずともこの思

軒をめぐる點滴、琴の音にたぐへて、七年の夜の雨、曾て知らぬ夢の世。

薄衣

思ひの種を蒔かぬやう

數ならぬ身にはたゞ、思ひもなくてあれかし、人なみなみの薄ごろも、袖の涙ぞ悲しき。

まことによき事に候也

あこがれて思ひ寐の、枕にかはす面影、それかとて語らんと、思

見せぬ姿ながら懐かし

へば夢は覺めけり。

白雪の深雪の、積る年は降るとも、飽くまじや諸ともに、寐亂れ髪の顔ばせ。

秋風はいやには非ずや

ひく人はそれ〴〵、あまたあれどもつま琴の、もとの心かはらず

ば、琴柱に落ちよ秋風、

香りもこぼれ來にけり

柏木の衛門の、鞠をとんと蹴たれば、鞠は枝にとゞまりければ、梅

はらりほろりと。

心までは引張ぬる物な

さりとては無情や、ひかふる君が袂の、あやにくに靡かぬは、手

飼の虎の引き綱。

桐壺

無常の文字も是より生る

桐壺の更衣の、比翼連理の契も、定めなき世の慣ひとて、夢の間

ぞ悲しき。

泣かぬ蟲は猶身を弱す

短夜の夢覺めて、面影は夏虫の、身よりあまる思ひをば、いかで

人に語らん。

山水の秋身にはしまん

秋の夜は更け行き、月は西に傾く、松風や浪の音、鹿の聲ぞ寂し

き。

せめてその衣なりとも

道しるべせし小君の、中だちにひかれて、行くへ迷ふか空蟬の、

衣の薫りぞゆかしき。

まことによき面の皮也

誰そや今宵小夜更けて、柴の扃を叩くは、尾上嵐の音づれか、水

雞の告る聲々か。

◎四季の友

まことに酒落た綺なり

青柳をかた糸に、よりて鳴けやうぐひす、鶯の縫ふてふ笠は、梅が枝の花笠。

四季の友

寒からぬと云はぬが妙

春立ち來れば我が宿に、先づ咲き初むる梅の花、君が千歳のかざしぞと、見るも長閑き色なれや。

一聲なればこそ聞ゆる

瀧の白玉千代の數、岩根に落つる五月雨の、雲間過ぎ行く杜鵑、唯一聲の音づれ。

虫の音をきけば猶更か

月をのみ眺めても、かく計り惜しまるゝ、秋の夜ごとを徒らに、過ぐる人こそつらけれ。

この花ぶいと清らか也

神無月時雨れても、色かへぬ松が枝の、緑埋める白雪は、十返りの花ならん。

中許目錄

須磨

露と君荷の酒落ならん

須磨といふも浦の名、明石といふも浦の名、更科の月ともにながめていざや明さん、

人の心は羊が先づ定評

春によせしころも、いつしか秋にうつろふ、黑木赤木のませの中に、よしある花のいろ〳〵。

鑫斯曰く我は獣へる也

きり〴〵す夜すがら、何をうらみすだくぞ、我も思ひにたへかね

初めより恨れば更に佳

て、いとゞ心亂るゝに。

なか〳〵に人をば、恨むまじや恨みじ、とにかくに數ならぬ、憂身の程ぞ悲しき。

風邪引かぬ用心が專一

三五夜中の新月、隈なきぞ面白や、千里の外の人までも、さぞやながめあかさん。

懇改ならばこそ玆迄は

深更に月冴えて、車の音の聞ゆるは、五條あたりの破屋の、夕顏をしるべに。

明石

いつ見ても臭からず

所から名にし負ふ、明石の浦の秋の頃、月冴え渡りよる波に、移ろふ影の面白や。

風景にて慰まるゝ程度

此の頃はいとゞしく、都の方の戀しきに、かゝる所の人心、憂きを慰む今宵かな。

と契つて置いても兎角

いつとなく永き夜を、かたり明石のうらなくも、如何で岩根の松の葉の、契は末もかはらじ。

御折介の千鳥なるかな

幾夜明石の浦の波、寄せては返り浮き沈み、哀れを思ふ折からに哀れを添へて鳴く千鳥。

よく〳〵もろき涙の露

庭の落葉か村雨か、かき鳴らす琴の音か、よそに知られぬ我が袖に、餘りて漏るゝ涙かな。

榮耀にも戀の身なるか

四智圓明の明石潟、迷の雲も打ち晴れて、八重咲き出づる九重の

◎末の松

都に歸る嬉しさよ。

末の松

こちの心に動きはなし

末の松山浪越すとも、變はらぬ色は松が枝に、君が千歳の限なき

そこに鶴の音の妙は有

汀の池に龜遊ぶ、

身に泌み渡る秋の頃、月も隈なき閨の戸に、歸るさ告ぐるくだかけの、まだきになくぞ恨めしき。

古い奴なれどその通り

なか〳〵に今はたゞ、思ひ絶えなんとばかりに、人づてならで言ふよしも、あらで焦るゝ身ぞつらき。

一わたりは然思ふべし

忍ぶ山忍ぶ山、あはれ忍ぶの道もがな、人の心の奥までも、見で

何を見聞きても涙の種

ややみなん我が思ひ。

小夜千鳥夜もすがら、啼くは我を訪ふやらん、須磨の住居のもの憂きに、涙を添ふる聲々。

我から變る心もあるに

契きなかたみに袖を、しぼりつゝ末の松山、浪越さじとは如何にいひけん、仇になりし怨かや。

物言はぬ寫眞ぞ恨めし

空蟬

空蟬のあるかと見れど、面影のかげもあやな、香をとめし小夜衣も脱けし人ぞ戀しき。

是も兎角詰通に行かず

尋ねてもなか〳〵に、あはでの森のあはでのみ、つれなきものは

どうも致し方がなき也

命にて、獨り胸をや焦すらん。
夜々にも我が袂、濡れつゝまさる戀心、人こそ知らぬ忘られぬ、

氣のもめる事に候はん

身のほどいかで詫まし。
戀しゆかしとつれなくも、かひなき世にも住吉の、まつは我身の

その悩しき昔が仇なり

思ひにて、逢はでや年を經るらん。
思ひかさねて年月を、經れば昔のなつかしく、思ひ出でたる今宵

左樣九十九夜の例も有

しも、涙に雨やさそふらん。
とにかくに〳〵、誠のあらば荒磯の、浪のあなたに隔つとも、寄
る邊のなどかなからん。

四季富士

東髪でよし島田でよし

田子の浦波打ち出でゝ、見れば雲井に高く名の、山の姿に四つの
時、分くるぞ分きて云ひ知らぬ。

薄紅に染るは殊によし

春は霞のあさもよひ、昨日の雪をそれながら、上なき花の色ぞと
て、見るや山は富士の根。

扇の風より涼しき眺め

雪に喩へて三重がさね、扇をとれる手の内、夏は消えて夕ぐれの
詠めをうつす富士の根。

月に一段の景を添へて

秋は更なり月雪、見ぬ人にしも語りなば、なか〳〵なれやなかな
かに、言はでやみなん富士の根。

深冬の白きは通例なり

深冬になれば都人、待つらん雪を鳥が啼く、東にすめば朝なぎに
見てこそあらめ富士の根。

赤人の腰を抜かせし所

時しらぬ〳〵、山は富士の根何時とてか、鹿の子斑に雪の降るらん、鹿の子斑に雪の降るらん。

雲井弄齋

三つの歌投節にてうたひたし

月と入ろやれ山の端に、離れ〳〵の浮雲見れば、翌の別もあの如く。

思ひそめたよ濃き紫の、袖は千入の我が涙。

忘れ草かな、のう一もとほしや、植ゑて育てゝ見て忘りよ。

三曲目錄

四季曲

この序は歌として蛇足

花の春立つ朝には、日影曇らでにほやかに、人の心もおのづから

のびやかなるぞ四方山。

春は梅にうぐひす、つゝじや藤に山吹、櫻がさす宮人は、花にこゝ

ろうつせり。

夏は卯の花、橘、菖蒲、蓮、撫子花、風吹けば涼しくて水に心う

つせり。

秋は紅葉鹿の音、千種の花に松虫、雁啼いてゆふぐれの月に心う

つせり。

冬は時雨初霜、霰みぞれ木枯し、冴えし夜のあけぼの雪にこゝろ

うつせり。

扇の曲

持つ人の腐たげなれば

扇は櫻の三重がさね、霞める月を畫にかきて、水に映ろふ心ばえゆゑなつかしき有樣。

蚊遣にていぶすは惜し

たそがれ時のまぎれに、ほの〳〵見えて咲けるは、小家がちなる軒のつまに、餘りてかゝる夕顏。

池の心ぞ月も知るらん

武藏野も更科も、須磨や明石の面影も、映してこゝに見る月の、詠はいつも廣澤。

現を分けて通へ思ひの

夢にばかり夜な〳〵、思ふ人を陸奥の、名古曾の關を誰かすゑて現に言も通はず。

それが何より手廻し也

戀ひ〳〵て戀ひ〳〵て、戀しき人を待乳山、待つらんものを行きて見ん、行きていざやあひ見ん。

マア意地のわるき事よ

あかしかねたる霜夜の、床も淋しき嵐の、音はそよ〳〵さら〳〵と、降るは霰の玉笹。

雲井の曲

例にて焦れ過ぎぬが妙

人目忍ぶの中なれば、思ひは胸にみちのくの、千賀の鹽竈名のみにて、隔てゝ身をぞ焦がるゝ。

今の思ひの淺き故にや

忘るゝや忘らるゝ、わが身の上は思はれで、仇名立つ憂き人の、末の世如何あるべき。

◎雲井曲

それでは浮む瀬がなし

たまさかに逢ふとても、なほ濡れまさる袂かな、明日の別もかねてより、おもふ涙の先だちて。

思ひ染のする事ならん

雨の中のつれ〴〵、昔を思ふ折から、哀を添へて草の戸を、叩くや松の小夜風。

氣の多き結果ならずや

身は浮舟の舵を絶え、寄る邊も更に荒磯の、岩打つ波の音につれて、千々に碎くる心かな。

顔と心と身分に御相談

雲井に響く鳴る神も、落つれば落つる世の慣ひ、さりとては我が戀の、などかは協はざるべき。

新組目錄

君が代は千代八千代に

神代の元旦も偲ばれて

心の垢も清めらるゝ樣

齡も延ぶるこゝちして

羽衣

君の恵は久方の、天の羽衣稀に來て、撫でし巖はそのまゝに、動かぬ御代のためしかな。

星を唱ふる皇の、雲の上まで長閑なる、朝の景色新玉の、春日曇らぬ天が下、

楢の小河の夕風に、白木綿懸かる波の音、神の心を清しめの、御祓ぎ夏のしるしなる。

齡久しき仙人の、折る袖匂ふ菊の露、打ち拂ひ〴〵、千歳の秋や送るらん。

◎羽衣

◎若葉

石山寺よりは殊に絶景

鴉の海面見渡せば、類ひなみ間に有明の、月影冴えて白妙の、雪をかけたる勢多の橋。

左様に行けば至極重疊

萬代かけて相生の、松と竹との深緑、變らぬ色は諸ともに、老いせぬ契なるべし。

若葉

罪深き目に逢ふ事かな

ゆかりよしある初草の、若葉の上を見つるより、いとゞ乾かぬ袖の露、なほ憂き増る旅寐かな。

いよ〳〵罪深きうは塗

現なや獨寐、夜半の枕に吹きまよふ、深山おろしに夢覺めて、涙催ふす瀧の音。

◎思川

こは思ふものゝ心弱く

いざさらば宮人に、行きて語らん櫻花、木の間の景色ことなるを風より先に見せばや。

かゝる事ある故にまた

隱れ家深き奥山の、松の扉をまれに開けて、まだ見ぬ花のかほばせを、見るより濡るゝ衣手、

斯る物憂目にも逢ふ也

黄昏すぐる折柄、仄かに見ねし花の色に、迷ふ心は朝霞、立ち煩らふぞ物憂き、

いよ〳〵戀の結論にや

何時しかに汲み初めて、悔しと聞きし山の井の、淺きながらもさりとては、たえぬ契をたのまむ。

思川

兎角する程に凋落せん

さて〳〵濟度の出來ぬ

恨む人の心そ恨みなる

正に實情とうなづかん

扨も仰山な思ひ様かな

◉思川

逢瀬仇なる思川、岩間に淀む水莖の、かき流すにも袖濡れて、乾す日も何時としら波し

面影のつく〴〵と、忘れもやらで思ひ寐の、夢だに見ねで明けぬれば、逢はでも鷄の音ぞつらき。

何時のまにかはかき絶えて、隔つる中となりにけん、見し玉章の文字が關と、名を聞くだにも恨めし。

つれなくも行く人を、とゞめかた見の唐衣、たつよりいとゞ我が袖は、露にぞしほれしほるゝ。

戀ひ詫びて只ひとり、伏家の床に夜もすがら、落つる涙は音無しの、瀧とや流れ出づらん。

それ故にこそ戀はあり

なか〳〵につらからば、唯一筋につらからで、情の交る僞と、思へば深き恨かな。

思ひばかりぞのこれる

橋姫

何を見ても悲しき俤に

水の上の泡沫、露に宿る稻妻、あるかなきかの世の中に、宇治の川の橋姫。

何よりのたまものなり

身の憂き時は立ちよらん、蔭と頼みし椎が本、空しき里となりにけり、契りの程ぞかなしき。

峯に生ふる早蕨、昔の花の面影、忘れ形見に摘みおきて、主なき宿に贈らん。

歎きての無理なき愚痴

前の世の契か、此の世のうちの情か、空しきあとゝ宇治の里、絶ねずこゝに宿り木。

そこな寄邊にはしてか

一方ならぬもの思ひ、寄る邊定めぬ浮き舟、仇なる名のみたちばなの、小島が崎に焦るゝ。

今の思に追はるより佳

小野の花の秋の頃、閨の妻の紅梅、それかとまがふ花園、昔の人ぞ慕しき。

この三つの歌も小唄の中に加ふべきものなるべし

新雲井弄齋

月諸ともに時鳥、鳴きて入るさの山の端見れば、はや短夜も明け渡る。

又の逢瀬もいざしら露の、あまりて置ける袖のうへ、げにも袖のうへ。

哀れはかなき憂世の中に、ともに絶ねせぬ契をぞ待つ、げにも契りをぞ待つ。

飛燕曲（一名清平調）

共に消えたき思ならん

久方の雲の袖、古りし昔忍ばし、花に殘る露よりも、消ねぬ身ぞはかなき。

せめての思ひやりには

夜を照す白玉の、數の光ならずば、天つ乙女の挿頭して、月に遊ぶなるらん。

◎飛燕曲

この夢ながらましかば　くれなゐの花の上、露の色もつねならぬ、夢は殘る横雲、降るは袖の涙かな。

を見るに付ても思ふ哉　なつかしや古を、忍ぶに匂ふ我が袖、濡れて干す小簾の外に、あはれ馴れし燕。

この心はありながらも　類ひなき花の色に、心移す此の君、現なき思ひこそ、いとゞなほも深見草。

誠に慾も得手勝手なり　散り易き習ひとは、餘所にのみ聞きし身も、移ろふは我が科、怨むまじや春風。

琴曲終

明治四十四年六月二十五日印刷
明治四十四年六月二十八日發行

琴曲　正價金參十錢

編輯者　東京市淺草區南元町二十四番地　中川愛氷
發行者　東京市淺草區森田町五番地　三輪逸次郎
印刷者　東京市淺草區森田町五番地　本城松之助
印刷所　東京市淺草區森田町五番地　本城活版所

不許複製

發行所　東京市淺草區藏前通南元町　電話下谷四〇三七番　振替東京一九〇四〇番　いろは書房
賣捌所　大日本音樂會

◎聲曲界空前の大著

中川愛氷君 解題 註 校訂

聲曲全書 全拾貳冊

定價一冊金參拾錢

●流派の由來、毎篇卷首に十餘頁に亙りて、詳細に且つ面白く記述す。

◉各派の家元　毎篇その流派頭梁の小照を載す、頗と聲を比較するも妙ならん。

◉歌詞と曲譜　長唄、清元、富本、新内、常磐津、浄瑠璃節、河東、浪花の義太夫、歌詞の篇頭、曲譜の名稱を記入す。

◉歌詞の評註　端唄、俗曲、小唄、地唄、荻江、薗八の諸流は歌詞の篇頭に其評註を載む。

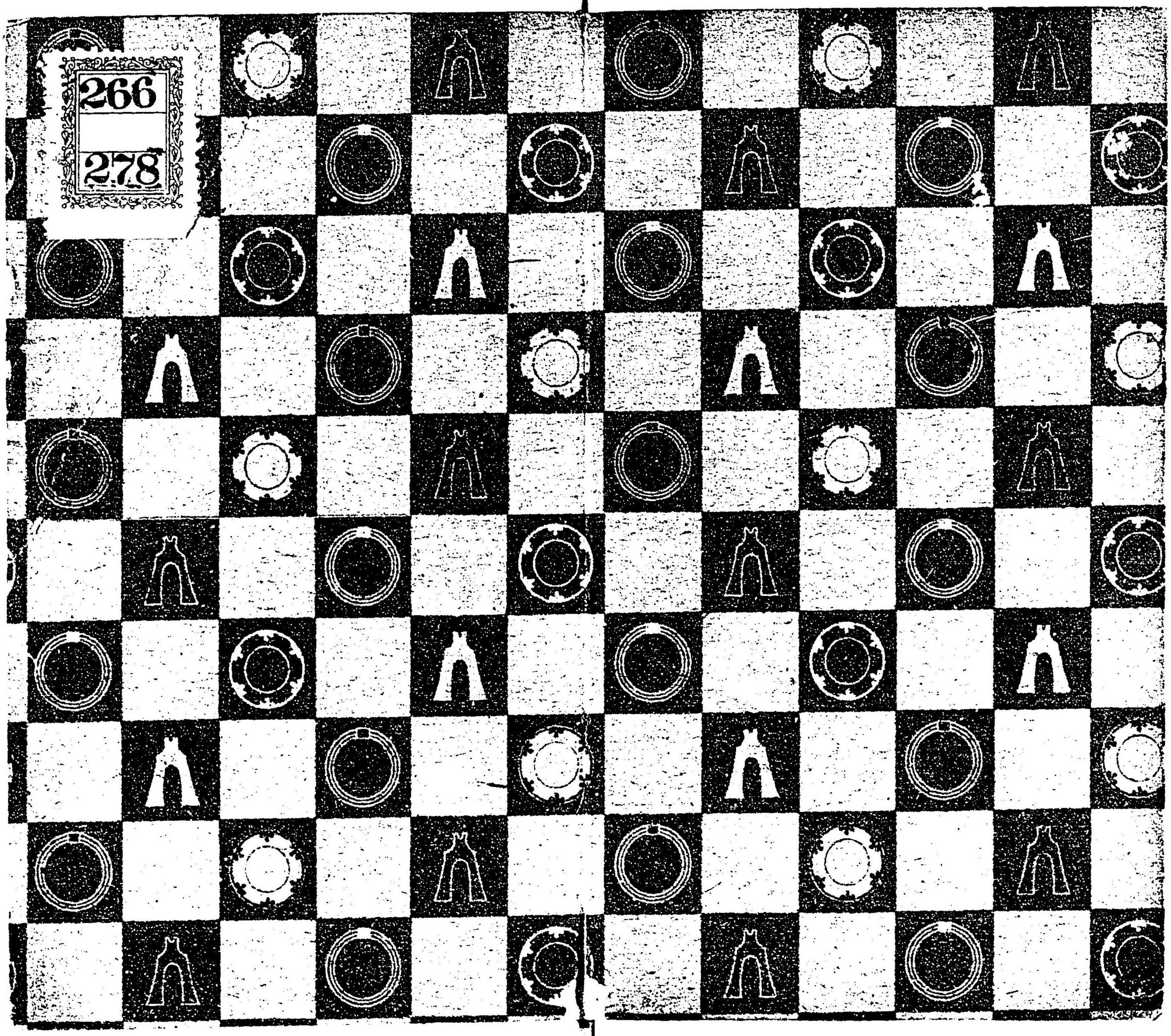
◎聲曲家必讀の珍書

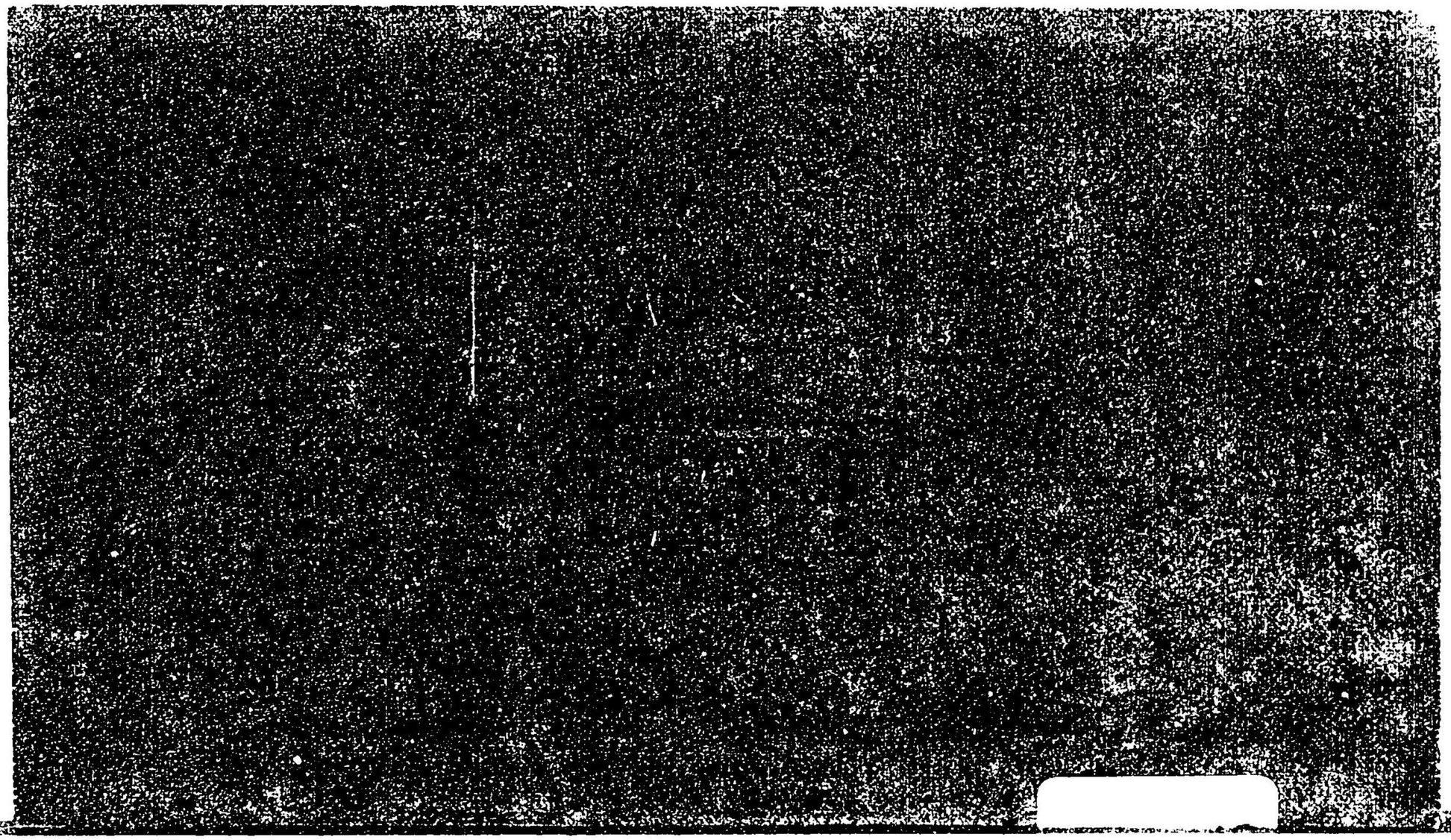
俳優	柳原義光君題辭	その壹 端唄
子爵	松平康義君題辭	その貳 長唄
伯爵	宗重望君題辭	その參 清元
伯爵	大木遠吉君題辭	その四 富本

兩派のうた澤全集

子爵	秋元興朝君題辭	その五
新内		
男爵	杉溪言長君題辭	その六
常磐津		
子爵	小笠原長生君題辭	その七
琴曲	生田山田両流の箏歌	
男爵	鍋川忠厚君題辭	その八
説教節		

男爵	金子有鄰君題辭	その九
小唄	うた沢以外の雅楽小曲	
子爵	入江為守君題辭	その十
地唄	上方唄	
男爵	千家尊福君題辭	その十一
河東節		
伯爵	東久世通禧君題辭	その十二
荻江		
一中節		
薗八		


266
278



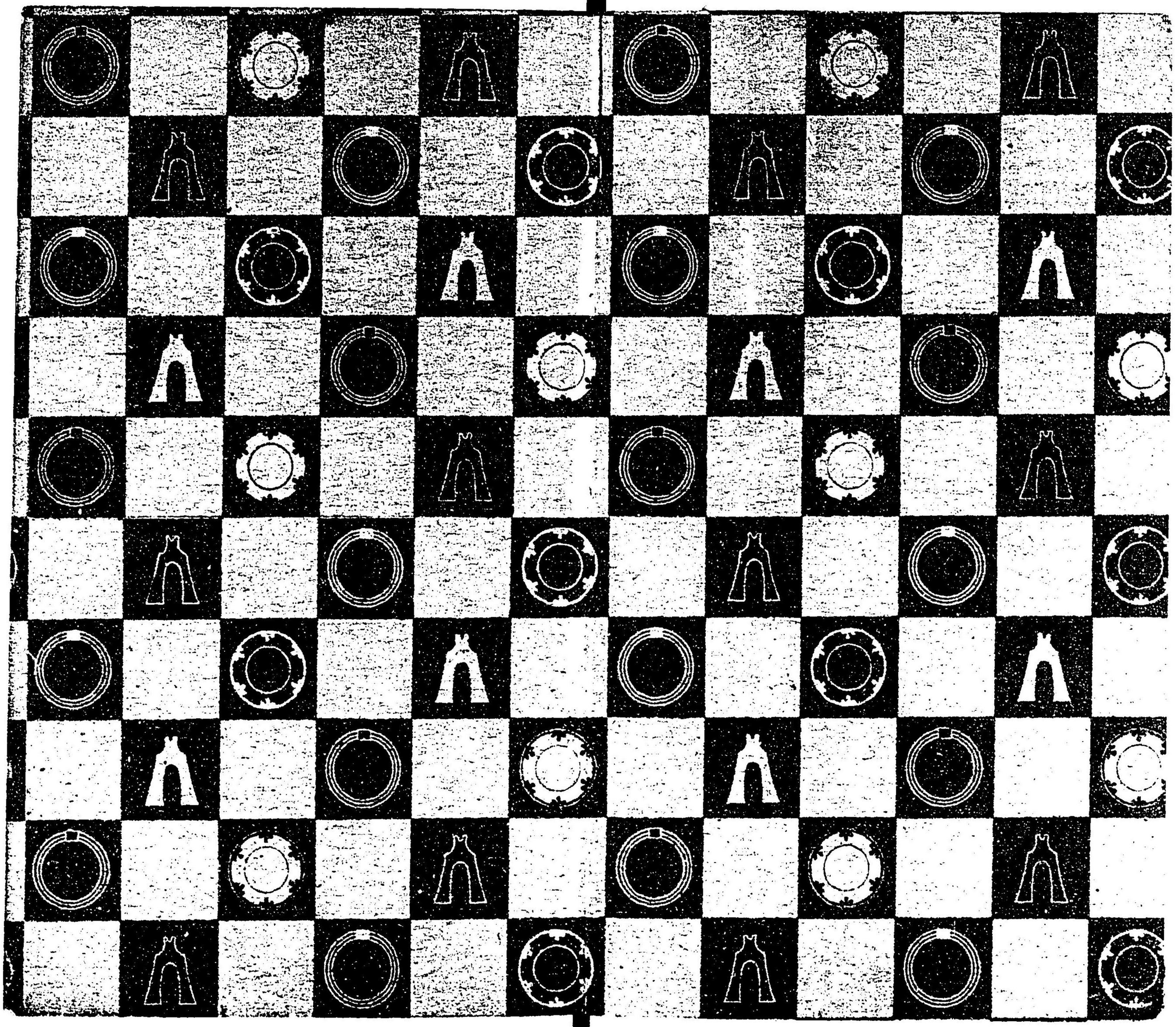
074454-000-6

特63-595

琴曲

中川　愛氷／校

M44

CEI-1723

266
278